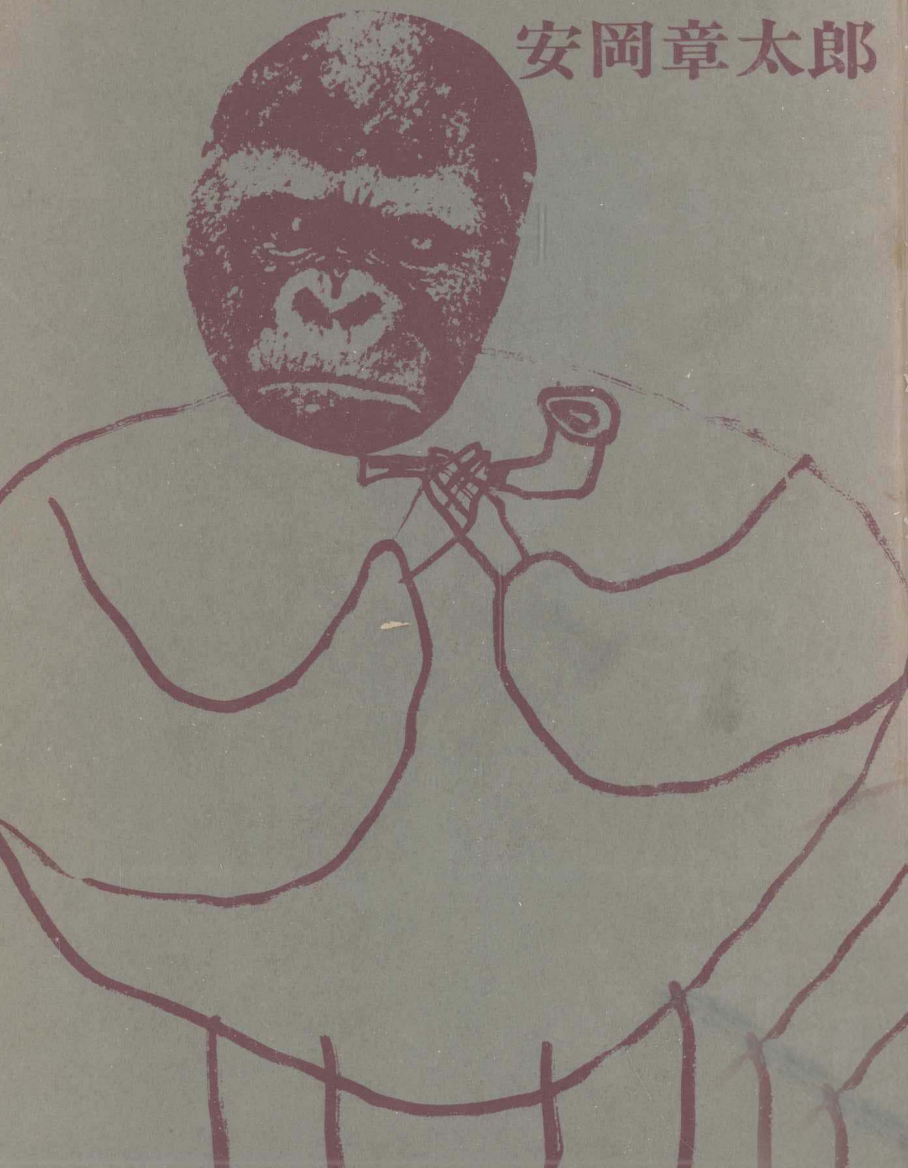
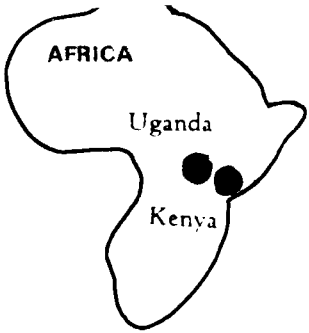
# サルが木から下りるとき

安岡章太郎






# サルが木から下りるとき

安岡章太郎
装画 永田 力

朝日新聞社

サルが
木から
下りるとき

定　価
520円
＊
発　行
昭和46年12月10日第1刷
＊
著　者
安岡章太郎
＊
装　画
永田　力
＊
発行者
朝日新聞社　角田秀雄
＊
印　刷
大日本印刷株式会社
＊
発行所
朝日新聞社
東京・大阪・名古屋・北九州

© *Shotaro Yasuoka 1971*
0095-253962-0042

サルが木から下りるとき　目次

1 その発端
集団移行時代 11
似たもの同士 15
進化はつづいているか？ 21
何かが起っている 26
キング・コングへの慕情 31
2 ナイロビとその周辺
あけがたの困惑 39
人猿一如 44
ジャンボ・アフリカ 48
アフリカの味 54

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

リフト・ヴァレーの彼方 58
3 モンバサへ行く
バオバブの草原をこえて 67
空と地球の切点で 72
港の郷愁 76
新しい道連れ 82
4 カンパラ今昔譚
ウガンダへ 91
アザラシの美女たちは何処に？ 97
黒い町の灯 103
清兵衛をやとう 108

セーベエと家庭の事情 114
5 ブドンゴの森で
チンパンジーにタックルされて 121
なまなましき〝進化〟 126
人類の進化とは 132
動物を尊敬すれば 137
生きている森 142
恐怖と尊敬 148
6 ピグミーとアンバ族のこと
危険な進入者 155
空疎なものの怖ろしさ 161

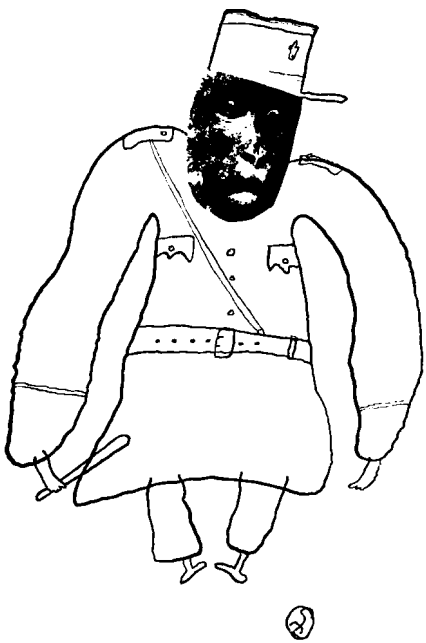
森の中の〝都会〟 166
ライク・ジス……171
地の底から 176
神代から現代まで一直線 181
7 アフリカ的遭難
白昼夢 189
証言と警官 193
帰宅の憂鬱 198
カンパラの夜 204
8 サルの行方は？
風立ちぬ 217

ホモ・モーベンス 221
方舟に乗せられて 226
落ちた偶像 232
白いゴリラ 237
ヒマラヤの雪女 242
歴史はつづく 247
＊
■あとがき 253

# サルが木から下りるとき

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

# 1 その発端



## 集団移行時代

パリの空は、暗く、たれこめていた。毎日雨が降り、何処もかしこも閉ざされていた。

地下鉄はたしかに走っているはずなのに、駅の入口を探すと何処にもなかった。レストランも看板は出ているのに、店は閉っているか、たまに開いていると思うと満員だった。劇場も閉っており、有名なオペラ座もお寺のようにひっそりかんとウズクマっていた。何よりも具合の悪いのは、どのホテルも部屋がふさがっていて、帳場の番頭にチップをにぎらせても一と晩ずつしか泊れないことだった。だから日本人の旅行者同士、顔を合わせるときまって、宿がとれないという話が出た。

私が最初に泊ったのは、便所の隣の——というより便所の中の一隅というべき——部屋で、べつに臭くはなかったけれども、そのかわり水洗の音が噴水のように、滝のように、入れかわり立ちかわり枕元に響いて、ほとんど一と晩じゅう眠ることが出来なかった。女中が部屋まで運んでくるパンとコーヒーの朝飯を食いながら、この音をきいていると私は、軍隊で初年兵時代に便所で隠れてマンジュウを頬張っている気分を憶い出した……。しかし、こんな宿でも、あとから詰

め掛けてくる客のために、飯を食いおわると早々に部屋をあけ渡して外へ出て行かなければならないのは、まったく何ということか。

「ノーキョーのお客さんが多過ぎるからですよ」

と、パリに腰を落ちつけて仕事をしている人はいった。

それは、そうかも知れない。私は数年前にも一度、この都会に立ち寄ったことがあるが、そのときも、

「こう日本人がいっぱいやって来ちゃ、パリもおしまいだネ」

と、日本のパリジァンたちが囁き合っているのを、しばしば耳にした。ただ、あの頃の日本人旅行客の代表は代議士諸先生であって、ノーキョーなる存在は日本国内にあってもさほど知られてはいなかった。つまり、それだけ現在は当時に比較しても圧倒的に日本からの旅行者が多くなっているというわけだ。

そうはいっても、パリ市中のホテルが皆、われわれ日本人やノーキョーさんだけで一杯になってしまったわけでは勿論ない。パリに集まる観光客の大多数は、アメリカ人、ドイツ人、それにフランス国内からのお上りさんらしい家族づれ等々であって、その中でわれわれが特に目立つのは、主としてわれわれの皮膚の色と一種独特の孤独な表情のためである。そして、この黄色く沈んだ孤独な想いは、われわれ一時の観光旅行者に限らず、在住の日本人全般の顔にも、あきらか

に見て取れるものであり、おたがいに顔を見合わすたびに連鎖反応的に大きくなって拡がり、「実際、何処へ行っても日本人が多過ぎるなア」という嘆声を、日本人同士が発し合うことになる——。

ところでパリの街が閉ざされていたのは、こうした私たちの集団的自己嫌悪のせいばかりではない。事実、あっちこっちが掘り返されたり、板塀に囲まれたりして、街全体が半身不随に陥っている感じだった。街中が工事現場に覆われているのは、東京の方がずっと物凄いはずだが、パリの場合はその工事現場が居眠りでもしているみたいに放っぽり出されて、そのために動きが止って閉ざされているのである。地下鉄の駅は、仮駅が何とか見つかったが、有名なルーブル博物館の入口が、いくら探しても見当らないのには驚いた。これは博物館が修理中なのではなくて、守衛さんたちがストをやっているためだったが、建物のまわりにはアカハタやタテカンは勿論、何一つストらしい風景はなく、単に古めかしい建物がヒッソリと冷たく雨にぬれて立ちはだかっているだけだから、われわれには何のことやらワケがわからないのである。

国営のルーブル博物館がストだということは、パリのほとんどの博物館が閉っているということで、これは観光都市パリとしては容易ならざる大事件であるはずだが、パリにいる人たちは、このストライキが一体いつから始まったかも知らないのである。

いいかげんにしろ、と私は思った。守衛さんの生活権も大事だろうが、ルーブルは何もフランス人だけのものではなし、まして守衛さんたちの持ちものでもない、ストをやるなら、なぜ一般に無料公開しないんだ。要するに、おまえさんたちはおれたち東洋の果てからやってきた客をバカにして、自分たちで勝手にナマけているだけではないか——？　そういう、おもい上がったぐうたらなフランス人労働者に較べて、われわれのノーキョーの何と立派な心掛けであることか！

私は、ホテルを追い出され、取っ手のとれた大きな旅行カバンを紐で縛って担いで歩きながら、心の中でそう叫んだ。

たしかに、これといって用事も目的もないのに、われがちにパリくんだりまで押しかけてくる私たちは、まことに奇妙な存在であろう。シャンゼリゼーの街路を一団となって、わき眼も振らずセカセカと短い脚を半分駈け足で通りすぎて行くさまは、まことに無類の珍風景であるかも知れぬ。しかし、このあわただしい集団旅行者は、じつは目下われわれが時代の一つの変り目に差しかかっていることを示すものなのではないか。たとえば、それは百万年のむかし、人類の祖先がそれまで木の上で暮していた密林を棄てて、ひろびろとした草原へ、二本の脚で立って歩きはじめたという、人間の歴史の決定的な瞬間に匹敵する時機に、いまわれわれが差し掛かっている、ということなのではないだろうか——。

無論、私はこのようなことを街行く人たちに向って呼び掛けるわけには行かなかった。私は、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.